第３章

全国の取組事例

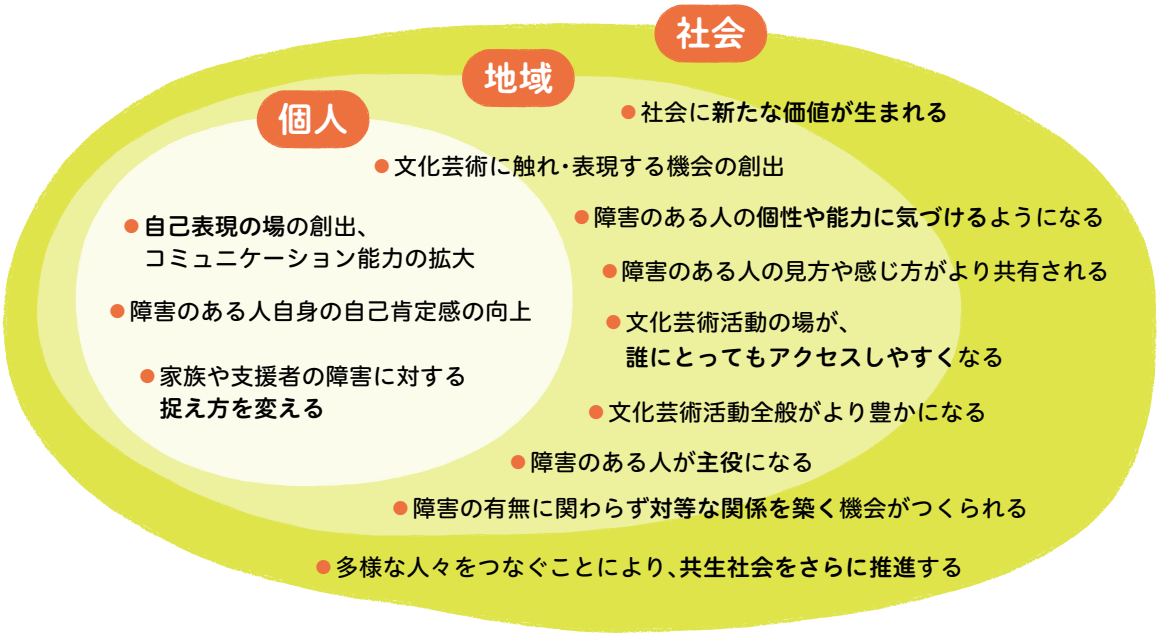
本章では、障害者による文化芸術活動の４つの事例について、現場で実践に取り組んでいる方々に、活動のきっかけやプロセス、関わる人たちの気づきなどを伺い、まとめました。事例を通して、文化芸術活動が障害福祉にもたらすものや、活動する上で大切な視点について考え、どうしたら日々の活動や暮らしをより豊かなものにしていけるのか、そのヒントを探ってみましょう。

今、どんなことが起こっている？

障害者による文化芸術活動は実にさまざまな形をとりながら、全国の福祉施設や文化施設などで展開されています。では、文化芸術活動を行うことで、福祉の現場にはどのようなことがもたらされるのでしょうか。前提として、障害者による文化芸術活動は、関わる人たちの立場が多様である、という特徴があります。障害福祉の立場から関わる人（障害福祉施設の支援者や、医療介護専門職など）もいれば、芸術の専門家として関わる人（外部から招へいするアーティスト、アートディレクターなど）もいます。そのため、もたらされるものも、また多様です。

例として、個人・地域・社会それぞれにどのような変化がもたらされるのかを、下の図で整理してみます。

●「障害者による文化芸術活動」が、わたしたちにもたらす変化の例



まず「個人」を見てみると、文化芸術活動を行うことで、障害者は自己表現の場ができたり、自己肯定感の向上につながったりします。また、家族や支援者にとっては、障害に対する捉え方を変えるきっかけとなります。「地域」に目を広げると、障害のある人の個性や能力に気づけるようになり、文化芸術活動の場が、誰にとってもアクセスしやすくなります。「社会」全体で見ると、障害のある人が主役となり、対等な関係を築くことで、共生社会の推進につながっていきます。

このように、障害福祉に文化芸術を取り入れることで、個人・地域・社会に好ましい変化が期待できるのではないでしょうか。ここからは、実際に事例を見ながら、文化芸術活動がもたらすものや、それを叶える上で大切な視点などを学んでいきましょう。

●掲載事例一覧

事例 1

精神障害のある人の世界を、のぞいてみると？

「幻聴幻覚カード」

団体名	ＮＰＯ法人シアターネットワークえひめ、就労継続支援B型事業所 風のねこ
連携団体	愛媛県障がい者アートサポートセンター

P.18

美術　つくる／語る　福祉施設・文化施設　精神障害

事例 2

即興ダンスに挑戦！

スプラウト× 白神ももこ　ダンスワークショップ

団体名	神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター（認定ＮＰＯ法人ＳＴスポット横浜）
連携団体	NPO法人障害児・者・家族サポート事業所スプラウト

P.20

ダンス　つくる／見る　福祉施設　知的障害、身体障害の重複障害

事例 3

誰でもアートを楽しめるように、みんなで考える。

盲ろう者とともにつくる美術鑑賞

団体名	ボーダレス・アートミュージアムNO-MA（社会福祉法人グロー）
連携団体	NPO法人しが盲ろう者友の会ほか

P.22

美術　つくる／見る・見せる／語る　文化施設　視覚聴覚障害ほか

事例 4

一人ひとりに寄り添った支援から、社会参加の場づくりへ

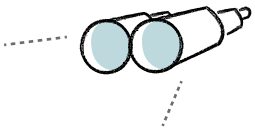
障害福祉施設に所属していない人たちへの支援

団体名	障害者芸術活動支援センター＠宮城 SOUP（NPO法人エイブル・アート・ジャパン）
連携団体	相談支援事業所、社会教育施設、これらを主管する行政担当課ほか

P.24

美術／その他の生活文化　つくる／見る・見せる／語る　文化施設　精神障害ほか

のぞいてみよう！ 全国の取組事例



事例 1

精神障害のある人の世界を、のぞいてみると？

「幻聴幻覚カード」

森本さん

天野さん

団体名	ＮＰＯ法人シアターネットワークえひめ、 就労継続支援B型事業所 風のねこ
連携団体	愛媛県障がい者アートサポートセンター

美術　つくる／語る　福祉施設・文化施設　精神障害

シアターネットワークえひめ 森本しげみさん、愛媛県障がい者アートサポートセンター 天野真紀子さんにお話を伺いました！

取り組んでいること

NPO法人シアターネットワークえひめは、舞台芸術の振興を目的に設立されました。2018年に就労継続支援B型事業所風のねこを開設し、主に精神障害のある人の就労支援とともに、福祉とアートの融合を目指して活動しています。

アーティストと関わる取組のヒントになったのは、2019年に東京のTURN展で知った「幻聴妄想かるた（※）」でした。それまで、風のねこで表現活動に着手できていなかったことや、地域のアートプロジェクトでも精神障害のある人の作品が少なかったことから、偏見や誤解の多い精神障害への理解を進めるためにも、アートが有効だと考えました。

まずは「ものづくりをしてみたい」という利用者の声を受け、支援センターのアーティスト派遣事業を活用。楽しみながら作品を作り、出展したり、展示を見に行ったりするうちに、作品作りや外部のアーティストに対する利用者の不安感もほぐれていきました。

そして2020年から取り組んでいるのが、精神障害のある人の幻聴や幻覚を絵に描いてカードにした「幻聴幻覚カード」プロジェクトです。外部からアーティストを招き、カードの内容について対話するワークショップ、デザイナーとの協働による缶バッヂ販売など、さまざまな展開につながっています。

※東京都世田谷区の就労継続支援B型事業所 ハーモニーが制作。ハーモニーに集まる人たちが、自らの幻聴や妄想などの体験を題材に作ったかるた。

プロセスはこんな感じ！

幻聴幻覚カードを制作

風のねこ利用者に、絵が得意な人が。そこで、幻聴幻覚のある人とペアになってその内容を聞き取り、絵にして、また話し合って…とじっくり丁寧にカードを制作した。

→

文化芸術支援団体に相談

地域の文化芸術振興に携わる松山ブンカ・ラボに、「カードを使い、アーティストを招いてワークショップをしたい」と相談。有門正太郎さん（俳優・演出家・劇作家）を紹介してもらえることに。

→

ワークショップで対話

幻聴幻覚がある人、ない人、アーティストが参加し、カードを使って対話。これから、演劇になるのか、ダンスになるのか、可能性は未知数。
現在は有門さんに加え、地元のアーティスト斉藤かおるさん（俳優）も招へいしている。

どんな変化や気づきがありましたか?

障害のある人の変化

風のねこ利用者の田和さん（カードの作画を担当）
「私には幻聴幻覚の経験がないのですが、みなさんのお話を聞いて、その苦しさや恐怖がよくわかりました。みなさんは、本当に強い方たちだと思います。」

風のねこ利用者の一色さん
「精神障害は偏見が多く、**本当のことを知ってほしい**とずっと思っていました。田和さんが何度も話し合った上でカードを描いてくれたのがうれしかったです。
また、幻聴幻覚について自分だけがおかしいのかと思っていましたが、カードを使った対話のワークショップのなかで、ほかの人にもそれぞれの幻聴幻覚や症状があることに気づかされました。偏見があるといやだと病名を黙っていましたが、思い切って話すとわかっていただけるんだな、と。また、アーティストの有門さんと話し、**自分の幻聴幻覚が何かの表現になる可能性がある**と感じました。劇なんかになっちゃったらうれしい！」

外部から招いたアーティストの変化

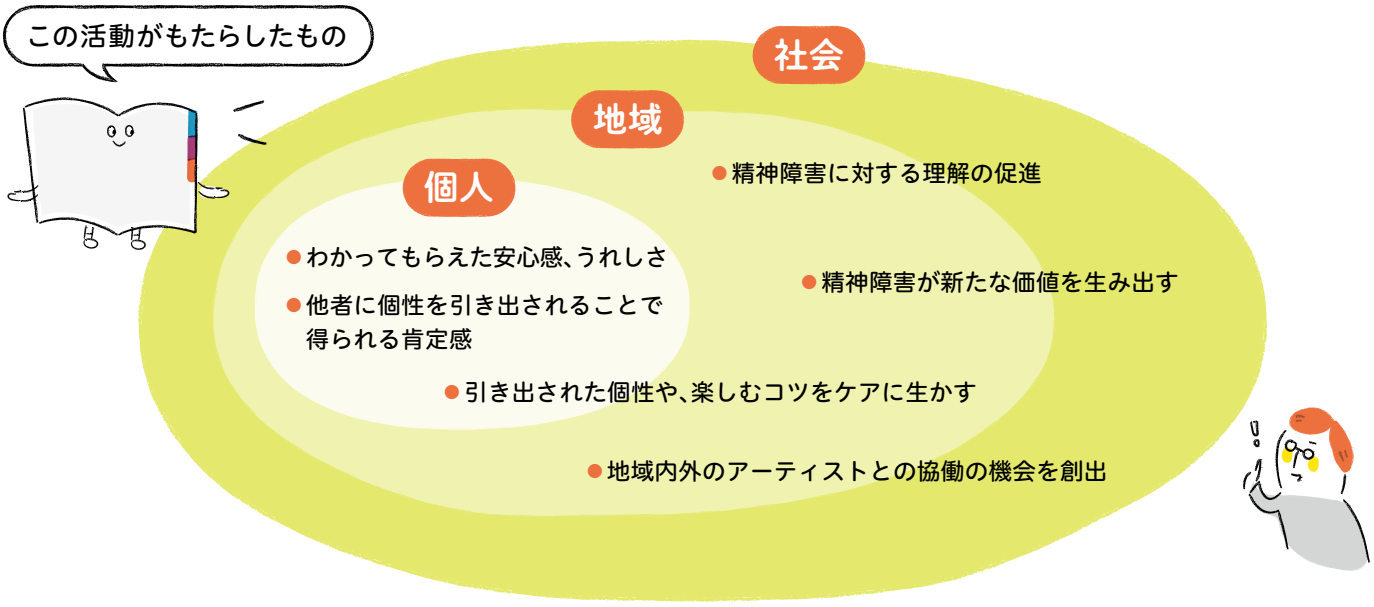
アーティストは幻聴幻覚の世界に驚き、「これをこのまま終わらせたくない」と、アーティスト魂を刺激されるようです。

企画側の気づき

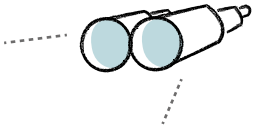
障害のある人自身も気がついていなかった部分や、得意だけど言えていなかったことなどがアーティストとの関わりの中で顕在化することがあります。例えば、実は習字が得意だったり、器用だったり、色づかいが独特だったり。
そうして文化芸術活動を通じて発見したことを、**日常のケアの関わりの中でゆるゆると生かしていくこと**を楽しんでいます。

大切にしている視点

- **外部から招いたアーティストにゆだね、発見をケアに取り入れる。**
  ケアにあたるスタッフが日常の業務を圧迫するほどがんばらなくてもいい。
  アーティストに任せ、利用者が楽しめるコツや、利用者の知らなかった一面などの発見をケアに生かす。
- **ゴールを決めない。**
  その場で起こることを、みんなで楽しむことが大事。



のぞいてみよう！ 全国の取組事例



事例 2

即興ダンスに挑戦！

スプラウト× 白神ももこ　ダンスワークショップ

田中さん

川村さん

団体名	神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター （認定ＮＰＯ法人ＳＴスポット横浜）
連携団体	NPO法人障害児・者・家族サポート事業所スプラウト

ダンス　つくる／見る　福祉施設　知的障害、身体障害の重複障害

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターの田中真実さん、川村美紗さんにお話を伺いました！

取り組んでいること

© 金子愛帆

© 金子愛帆

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターは、2019年から2020年にかけて、生活介護事業所スプラウトとの連携のもとでダンスのワークショップを実施しました。外部からアーティストとして白神（しらが）ももこさん（演出家・振付家・ダンサー）を招き、リズムに合わせて振り付けを踊るのではなく、即興的に体を動かし、身体の感覚をすくい上げることを重視した活動を行いました。

2017年に行ったアンケートで、スプラウトは「ワークショップを希望する」と回答しました。そこで支援センターはヒアリングを行い、人との交流が限定的になりがちな重度障害のある人の活動を広げたい、障害福祉施設として音楽や美術には既に取り組んでいるが、さらに広げたいというスプラウトのニーズを聞き取りました。支援センターはそこでダンスを提案し、実現に至りました。

スプラウトにダンス活動の経験はなく、白神さんも障害のある人とのワークショップは初めてだったとのこと。「うまくいかないことがあってもいい、可能性をみんなで見つけていく」スタンスで柔軟に取り組みました。

２年目はコロナ禍のためオンラインでの実施に。直接ふれあえない中で、ダンスによってどのように他者とつながっていくのか。試行錯誤しつつ、PCの画面越しに同じ色のカラーゴムや帽子を用い、場所を超えて時間や経験を共有できるような工夫を取り入れました。

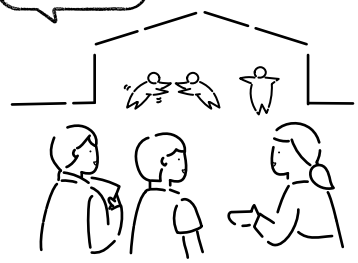
プロセスはこんな感じ！

ニーズ調査

アンケートをもとに福祉施設へヒアリングを行い、ダンスを提案。アーティストへの依頼の際には実際に作品やインタビューなどを見て、今目の前にいる人に向き合える方にお願いしている。

→

現状把握



アーティストの白神さんと支援センターのスタッフがスプラウトに出向き、場所と参加者の様子を見た上で、担当職員と現状や課題の共有を行う。

→

ワークショップの実施

© 金子愛帆

厳密な段取りや目標はあえて決め込まず、臨機応変につくっていく。終了後は振り返り。何がよかったか、何にヒヤヒヤしたかなどを率直に話し合う。支援者が抱く不安や懸念もフォローするのが重要。

どんな変化や気づきがありましたか?

障害のある人の変化

白神さんとの出会いや関わりの中で生まれる、**ハプニングのような出来事に対して新鮮な反応**があり、楽しめていました。

地域の障害福祉施設の変化

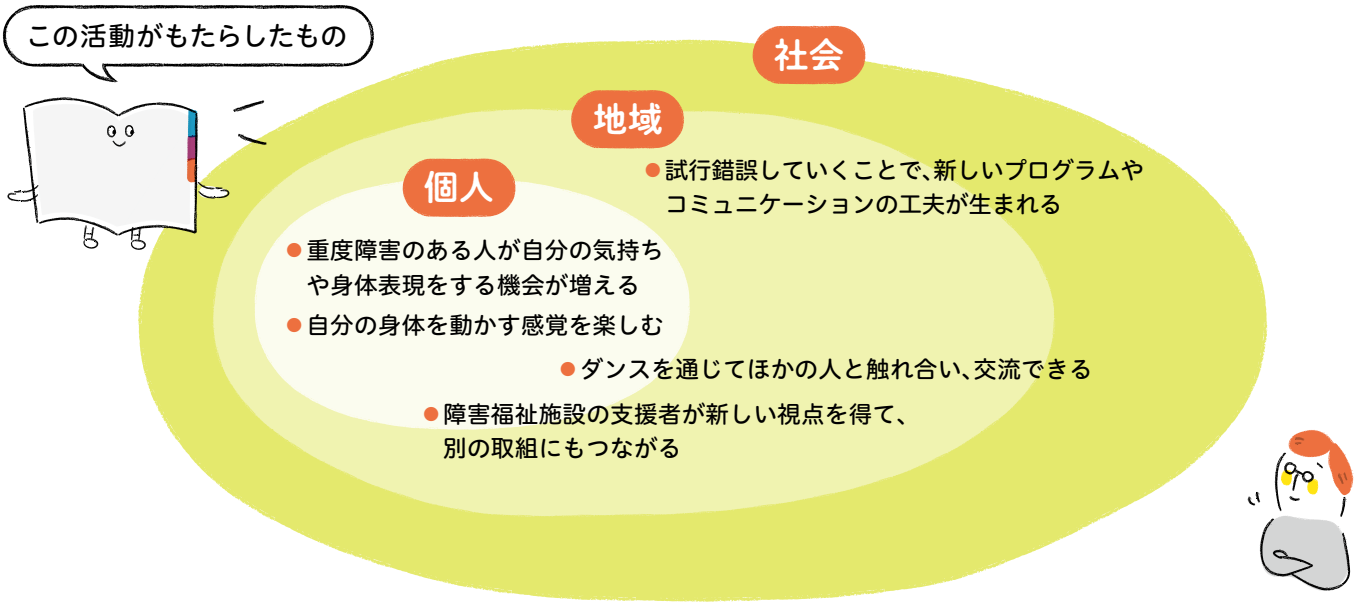
神奈川県内でワークショップを希望し、公募に応募する障害福祉施設は増えています。作品制作に限らない、**「体験」することを支援する**方向性は、ほかにあまりないものなので注目されています。

支援者の変化

この企画ののち、スプラウトはコンサート鑑賞の企画を検討したそうです。当初は「コンサートみたいなものはあんまり楽しめないんじゃないか」という先入観を抱いていたそうですが、この企画で利用者が関心を持って白神さんのワークショップに参加している様子を見て「(コンサートのような企画も)うちでもいけるんじゃないか」と、**考え方が前向きに**変化しました。

企画側の気づき

支援する上で「支援センターだけではやり切らないし、やり切れない」ということを強く意識しています。限られたマンパワーですべてを遂行しようとするのではなく、**障害福祉施設の主体性を後押しする**ことを重視しており、相談内容によっては別の助成金への応募を勧めることも。支援をきっかけに、今ではすべて自分たちで企画を立てているところもあります。

大切にしている視点

- **障害福祉施設の企画立案力をサポートすること**
  障害福祉施設の自主性そのものを支援していく。
- **既存の芸術のイメージに囚われないこと**
  文化芸術は幅広いもの。ジャンルにこだわらない表現の可能性を考える。